

大倉工業株式会社 2023 年 12 月期決算説明会 質疑応答

Q. 2023 年の合成樹脂事業は、販売数量が減少したものの、交易条件が改善した形になり、当初の想定を上回る結果となった。構成の改善について教えてほしい。また、今期もその状況が続くのか？2024 年の利益計画が、中期経営計画に対して若干の未達になるのは、外部環境・経済環境によるものなのか、要因を教えてほしい。

A. 2023 年は国内における食品・日用品の買い控えの影響を受け販売数量が減少しました。一方で 2022 年から販売価格への転嫁を積極的に進めてきたことや、付加価値の高い製品の拡販、製造設備の整理・人員の最適化を進めたことにより収益力を高めることができました。原材料価格は 2022 年に比べて高い水準ではありましたが、収益力向上により増益となりました。

その中で、売上の分母は小さいが、利益率の高いリチウムイオン電池用のタブテープの販売が伸びたこと、汎用性が高いベーシックマテリアル製品で難しかった製品値上げが進み、付加価値が高まったことで改善につながりました。

2024 年の外部環境の予想ですが、国産ナフサ価格は 70,000 円/KL レベルの水準での推移を前提としております。販売面で、中国向けの食品・日用品の需要減が続くものの、国内向け消費は春以降買い控えが収まると見込んでおり、また、自動車関連は引き続き回復基調が続く、市況が悪化していた電子材料、半導体関連の需要回復も見込んでおります。

その様な予想の中で、電子部材用で中国勢との価格競争で採算が悪化している製品や、その他想定以上に需要が減少している製品もあり、設備集約等の費用を織り込んでいること、また、人件費を含む固定費で当初想定より増加を盛り込み、中期計画最終年度の利益目標からは未達となる予想です。

Q. 新規材料事業部の大型 LCD 能力が大幅に伸びているが、引き合いは堅調に継続ということでもいいのか？新工場分まで埋まるのはいつ頃と考えているのか？また、R&D の高機能ディスプレイ材料とあるのは、光学補償なものか、反射防止とか表面硬度とか防汚性などが教えてほしい。

大型液晶向け広幅光学フィルムは特に 2,500mm 幅を中心に需要が増加していることから、当社は 2023 年に G2 ラインを新設し、生産能力を 2 倍に増強いたしました。G2 ラインは今年から量産を開始しています。顧客からの引き合い状況から需要は活況に推移すると見込んでおり今期中に埋まると予想しています。また、R&D センターの精密塗工については、タッチセンサーや反射防止関連のテーマを中心に開発を進めています。

Q. 株主資本コストの水準と自己株式の取得に対する方針について教えてほしい。2023 年の ROE が 7.4%と計画を若干下回ったが、現預金や保有株式、借入など施策を講じた上で、財務健全性を損ねない範囲での自社株買いは考えられるか、教えてほしい。

A. 2023 年は過去最高の当期純利益を達成しましたが、当社の資本コストは 7~8%と想定していますので、目標としている ROE8%を早期に達成することを念頭に「事業戦略」「財務戦略」「非財務戦略」の各課題解決に取り組んでおります。最低限の運転資金の確保は必要と考えていますが、保有株式の縮減など、資本効率性を高める施策を進めていくなかで、自己株式の取得も検討していきます。

Q. 新規材料事業について、2023年第4四半期の営業利益が落ち込んだが、マーケットの調整を受けたのか、コストによるものか、要因を教えてください。また、今期の新規材料部門について、営業利益を3億円程伸ばす計画になっている。全社ベースで償却費が13億円程増加する見込みになっているが、新ラインの償却費がどのくらい増えて、どのくらい数量効果が出るのか教えてください。

A. 2023年第4四半期では、需要の問題でなく、期末の在庫影響とG2ラインの量産に向けた立ち上げ費用による一過性のもので、外部環境による影響はありませんでした。
なお、G2ラインの設備投資に伴い2024年の減価償却費は9億円程増加いたしますが、大型液晶向け広幅光学フィルムの販売数量増加により、新規材料事業全体では営業利益21億円と増益を見込んでおります。

Q. 四国地域材事業について70億円の投資とのことだが、どういう形、タイミングで出てくるのか、教えてください。

A. 当事業は四国地域材および香川県産材からJAS製材、集成材の構造材を製造して販売する事業であります。約70億円の内、既存のプレカット事業を新工場敷地内に移設することで約17億円を投資し、今年2月から稼働しています。新たな構造材、集成材事業に約53億円を予定しており、合計で約70億円です。香川県産材、四国地域材を利用する事業ですが、香川県産「ひのき」は、杉や他の地域のひのきと比較して強度があるといわれており、その構造材は非住宅の木造化にも貢献します。2026年に新工場の稼働を予定しております。既に原木の伐採・製材・販売に関しては関係者様と協定を締結しており、販売スキームも確保できております。

Q. タブフィルムについて、リチウムイオン電池の車載向けで使われると推察していますが、そのような用途が伸びているということでしょうか？

A. タブフィルムは主に電気自動車のリチウムイオン電池に使用されております。足もとではバッテリーの大容量化により、更なる封止機能・耐熱性が求められており、当社の強みである製膜技術を活かし、対応可能な製品開発を進めております。市場規模は大きくありませんが、今後も拡大が見込まれる市場であることから、設備を強化し、積極的に新アイテムを投入してまいります。

Q. 高周波基板用フィルムについて、どういうタイミングで立ち上がる製品なのか教えてください。

A. 当フィルムは次世代通信規格5Gで要求される伝送損失が低く、耐熱性や寸法安定性に優れたフィルムです。本来の5G、ミリ波対応には、インフラ整備が必要で、想定としては2026年～2027年以降に採用が本格化すると見込まれております。

以上